

審査員からのコメント

【岸本葉子さん・エッセイスト】

祖父から聞いた体験談を核として、昭和館での追体験により、戦争についての学びを広げ、深めたという行く立てが、非常に印象的。祖父の身に起きた出来事から、戦争とはどういうものかの理解や、世界平和への思いへ敷衍している。体験者の話を直接聞ける最後の世代と自覚して、語りの継承の中に進んで身を置き使命と夢を持つに至った、決意溢れる姿が力強く頼もしい。語り継ぐことの大事さを改めて教えられた作品である。

【関沢まゆみさん・国立歴史民俗博物館教授】

古賀さんの「平和を紡ぐ」は、自身の祖父(90歳)が小学5年生だったときの学童疎開の辛い経験を聞いていましたが、昭和館を見学して、「命を失ってしまった人が大勢いたという事実、胸が締め付けられた」といいます。そして、現在のウクライナやガザでの戦闘にふれています。古賀さんの夢は児童文学作家。子供たちに戦争の残酷さと平和の尊さを語り継いでいきたいという夢を応援したいと思いました。

【伍藤忠春・昭和館館長】

祖父の体験談に耳を傾け、昭和館が戦争を追体験できる場所だとの認識に説得力がある。

自分たちが戦争体験者から直接話を聞ける最後の世代だとの認識も視野が広くて素晴らしい。